

大分県の山間地帯における肉用牛の経営事例と放牧に関する若干の技術的問題点について

寺 尾 正 二

(大分県久住種畜場)

TERAO, S.

Some Problems on Beef Cattle in the Intermontane Area, Oita Prefecture.

— On management and grazing —

肉用牛の飼育頭数は昭和31年の272万頭を頂点として段々減少し42年には155万頭となり、戦前(昭10)に近い状態となった。しかし地域的にみると九州地方は最も和牛の飼育頭数が多く、特に41年以來の伸び率は高く、現在全国の約38%を占めている。肉の需要は今後大幅な増加が見込まれ、又農家の経営改善のためにも、肉用牛増殖の要請が強いが、大分県においては久住飯田高原開発計画を推進し、和牛の飼養はこのような山間地帯を中心に伸びつつある。

ここで紹介しようとするK農家は久住山麓の高冷地(大分県直入郡久住町)にあるが、米と牛と椎茸を経営の柱とし、農業粗収入約450万円(昭42)をあげており、しかも和牛部門の収入も約133万円と高く、山間地帯における和牛経営に関し一つのあり方を示すものと考えられる。

K 農家の農業粗収入

部 門	昭41	昭42	備 考
米	1960千円	2381千円	
和 牛	836	1333	
椎 茸	850	774	(乾)約420 kg
計	3646	4488	

K 農家の経営概況

経営面積は水田2.98ha、畑0.7haで極めて経営規模が大きい。水田のうち1.3haは裏作に飼料作物を入れ、1.0haに実取り麦を栽培し牛の飼料としている。畑の0.7haは一部自家用菜園としその他は飼料作物を栽培している。同上の他採草地2.0haと放牧地7.0ha(いづれも野草地、うち4.3haは櫟林)を持ち他に杉林9.5haと入会権を持つ共有の牧野35haがある。

牛の飼育頭数は成牛11頭、育成牛4頭、産子10頭計25頭(昭42)である。

農業労働力は戸主夫妻(39才と38才)とその両親(67才と60才)及び高校卒の長男(19才)である。

労務分担、農作業は次のように忙しい。

3月下旬～4月下旬まで：椎茸の収穫乾燥(100人)
 4月中旬～6月中旬まで：苗代及び田植(175人)
 麦刈り(30人)
 9月下旬～10月下旬まで：稲刈り脱穀調製(145人)
 11月上旬：麦播き(30人)
 11月中旬～1月下旬まで：椎茸原木伐り、菌打ち(120人)

同上の間を縫って飼料作物の栽培貯蔵が行なわれる。これ等の仕事は主として戸主夫妻と長男の分担であり、和牛の管理は主として戸主の父(67才)が担当する。

山 と 牛

徹底した放牧管理方式である。このため経営面積が大きいにも拘らず農作業を圧迫することなく、しかも老人による多頭飼育を可能としている。

4月 裏作の水田に時間放牧
 5月～11月 共有の牧野へ昼夜放牧
 12月 私有の里山へ “
 1月 舎飼いと運動のため里山放牧
 2月～3月 完全舎飼い。

放牧地7.0haのうち4.3haが櫟林で毎年椎茸原木を0.4ha前後伐採するが、櫟が4～5年生の時一部に杉を植栽する。ここは牛の放牧場となる。2.0haの採草地は8月乾草を作り、初冬放牧利用する。

田 と 牛

最近5ヶ年間の米の収量は次表のとおりで、久住町の平均収量と比較すると極めて高い。品種の選定、病害虫の徹底防除等稲作技術に真剣に取り組んだ結果であろうし又廐肥の施用量10アール当り1200～1300kgも増収の一因と考えられる。

水田2.98haのうち1.3haには裏作にイタリアン・レンゲ・レープの混播、青刈燕麦を播き、ここを牧棚でかこって4月中1日2時間程度時間放牧する。このため冬期の貯蔵飼料がそれだけ少なくなくて済み多

K 農家の稲作収量

	面積 (ha)	生産量		10アール 当り 収量 (A) kg	久住町平 均 収量 (B) kg	A/B
		自家用	供出量			
38年	2.98	20 ^俵	180 ^俵	402	386	104%
39年	"	20	216	475	434	109
40年	"	20	240	523	392	133
41年	"	20	255	553	375	147
42年	"	20	304	652	567	115

頭飼育を容易にするとともに、予備放牧としての意義が大きい。又別に1.0ha実取り麦を栽培しその生産2400kgは家畜の飼料にあてる。

牛の飼育頭数と産子数

牛の飼育頭数と産子数

	34年	35年	36年	37年	38年	39年	40年	41年	42年
成牛	7	8	8	8	9	8	9	10	11
育成牛							3	2	4
産子数	6	7	6	7	8	8	9	10	10

上表の成牛及び育成牛の数は繁殖用の基礎畜で実際には子牛の一部は育成の上売却するので、常時20数頭飼育されている。一貫した多頭飼育と、とくに生産率の高いことは特筆に値する。昼夜放牧地帯においては発情発見や適期授精困難のため生産率が低くなるのが普通であるが、冬の間に子牛を産ませ、受胎したものを春放牧に移すことを原則とし、一部未受胎牛は里山放牧や舎飼いと、生産率向上のための工夫がなされている。

牛についての吟味と和牛の収益

収益を高めるため牛についての吟味も怠らない。K農家においてはたまたま入手した産子成績の優秀な「ひので5号」の産子4頭を育成保留し、又その産子4頭を育成保留しこれが繁殖牛の中心である。この他の牛もすべて自家生産牛であるのでピロプラズマ病等の放牧病に強く、放牧による事故も殆んどない。基礎畜の整理が進み今後一層収益性の向上が期待できる。41～42年の和牛生産部門における収益の概算を次表に示す。

久住種畜場における子牛生産経営事例

次に久住種畜場における子牛生産経営事例を示す。これは当地方における和牛多頭飼育農家を想定し、和牛の成牝牛10頭を野草地3.5ha、人工草地1.5haに早春より初冬まで昼夜放牧し、昭和40年～42年に至る3年間の成績を取りまとめたものである。

和牛子牛生産部門の収益概算

		昭 41	昭 42
収入	子牛粗収入	836,000 ^円	1,333,000 ^円
	飼料費	132,000	185,000
経	建物費	11,500	11,500
	農具費	30,500	30,500
営	直接材料費	16,300	19,000
	賃料料金	85,000	75,200
費	公租公課	?	—
	計	275,300	321,200
収益概算		560,700	1,011,800

和牛子牛生産経営実績（成牝牛10頭）

	粗収益	生産費		1日当り労働報酬	農業所得
		1次	2次		
昭40	887,600	547,836	638,158	2,902	416,109
41	883,000	540,571	641,971	2,867	423,249
42	1,346,600	615,098	747,888	5,836	826,602
平均	1,039,067	567,836	676,006	3,868	555,320

粗収益から直接経費のみを差し引いた場合の収益は3ヶ年平均で748,795円となる。このように収益性の高かったのは最近子牛の値が高くなったこともあるが、昼夜放牧により省力管理したこと、子牛の生産率の高かったこと（3年間に31頭生産）及びクリープフィーディングや販売前子牛を収牧して飼育しを行ない、その商品化を高めたことによる。大分県の平均農業所得は381,700円（昭42）であるが、K農家や当場の例からみても10頭程度の経営規模とすれば立派に農家経営の柱となし得るものと考えられる。

里山等を利用した放牧管理は多頭化に最も適した方法といえるが、放牧地の牧養力を高め、又牛の産肉能力を発揮せしめるためにはやはり或る程度の草地改良は必要であり、その面積は当場の試験例からみれば1頭当り0.2ha前後はほしいようである。この他若干の野草地も取り入れる。なお、草地改良は当地方のような高冷地では粗耕法で充分であり又踏耕法もよい。次に子牛生産率を高めることが最も重要であり、このための配慮を要するし、子牛の商品化を高めるためには放牧中のクリープフィーディングや放牧による飼育直しも必要である。又ダニやピロプラズマ病等の被害についても特に注意を要する。